

# 病い



「病いは気から」といういい方がある。気分が悪ければ「病気」になり、気分がよくなれば「病気」でなくなるというわけだ。「気」が原因なら、気の前である「元氣」を取り戻せば気分はよくなるに違いない。これは、漢方医学による解釈である。わたしたちにとっての身近な病いや、世界各地の不思議な病いを取り上げ、多様な「病い」のあり方について紹介する。



はるかととんという相反する要素によって分類されている。

興味深いことに、この二項対立的な認識は cold という病いの概念的な枠組みそのものにもかかわっている。cold はそれと正反対の要素をもつ病い、 fever と対で認識されている。cold、すなわち発熱はわたしたちにとってはかぜの典型的な症状のひとつであるが、cold の症状として認識されることはない。fever の原因は germ、すなわち細菌が他人から感染し、口、鼻、肛門などをとり体内に入ると生ずると考えられる。Feed a cold, starve a fever! といういいまわしがあるように、cold の治療としては温かい食べ物や飲み物を摂ることが推薦されるが、対照的に fever を抑えるには食事は控えるにすることが求

## 文化としての かぜ

近藤 英俊  
(こんどう ひでとし)

関西外国語大学助教授

### かぜと cold は違う病気?!

かぜはわたしたちにとって、もつともなじみのある病気のひとつである。日本

人は一年間に平均五、六回はかぜを引くといわれている。さらに世界的に見てもかぜはよくある病気だと一般に思われているだろう。しかし医療人類学的に言えば、「かぜ」は世界中の誰もが引く病いだといえないのである。

学校の英語の授業で、かぜのことを cold と習う。実際わたしはイギリスやアメリカに滞在中かぜを引くと、現地の医師や友人に向かって 'I've got a cold' などと言えば、相手はその意を十分汲んでくれるように見える。ところがこのミニユニケーションは微妙な誤解のうえに成り立っている。日本で医師などの専門家でない普通の人がかぜを経験する cold は、じつはまったく同一の病い

とはいえないのである。

医療人類学者で医師でもあるヘルマンの研究によれば、ロンドン郊外に住むイギリス人にとって cold とは体温が低いと感じる病い、つまり文字どおり寒さの病いである。彼らは cold が外界の寒さが肌をとおして身体の中に浸入することで生じる病いだと考えている。cold の共通の症状は上半身の寒さであるが、それに鼻水、痰、あるいは下痢などの水分を伴う湿りな cold と、これらを伴わないが寒さのひどい dry な cold のふたつのタイプがある。この症状の違いは原因である外界の寒さの性質の違いとも対応している。wet な cold は雨に濡れたせいで生じるものであり、dry な cold は冷たい風にさらされたせいでかかるものである。つまり cold

められる。栄養は細菌にとつても栄養となると考えられているからである。

### 二〇〇種以上のウイルス

したがって、かぜと cold は概念的に重なる部分があっても同一のものとはいえない。これらの病いは、それぞれの地域で人ひとが社会的に構築した概念であり感じ方である。いい換えれば病いには文化

とが文献から確認できる。

以上のように人ひとが病いをどう感じ、認識し、そして対処するかは地域ごとに多様であり歴史的に変化する。確かに近代医療は今日グローバル化し、人ひとの病いをめぐる経験はその大きな影響下にある。しかしその発展著しい日本でもさえ、わたしたちは医師とまったく同じように病気を認識しているわけではない。かぜはじつは、医学的にはひとつの疾病とはいいがたい

彼にとつて数値は、身体の状態を示すだけでなく、「いのち」の指標だ。一日四回測定する血糖値は、一日の食事量と運動量、そしてインスリン量を決定する重要な数

## 糖尿病を生きる

浮ヶ谷 幸代

(うきがや さちよ)

千葉大学非常勤講師

### 「いのち」の指標

日本人の六人に一人は糖尿病であるといわれるように、糖尿病は誰でも知っている身近な病いである。今日、糖尿病は自覚症状がなくても血糖値の異常によって「病気である」と診断される。わたしは糖尿病に興味をもったきっかけは、

調査を始めたころ、糖尿病になって二〇年以上経つ四〇代の男性に「あなたは病気だと思いませんか」と聞いたことがある。すると、「病気なんかじゃない。いたって健康だよ。仕事に夢中で病院に行かなかったときの方が病気だった」と答えていた。彼は、現在一週間に三回透析に通い、強度の視覚障害を抱えながら生きている。彼は合併症のある身体で透析用の食事を自分で用意し、わずかな視力でカンを頼りに電車に乗ってクリニックに通って来る。血糖のコントロールは、主治医からもお墨付きで模範的な数値を維持している。



糖尿病患者用メニューの会食風景。調理実習にて(左手前が栄養士、左手奥が筆者)

ものである。特定の病因(ウイルス、細菌など)とそれがもたらす症状がひとつの疾病を形成するという見地からすると、かぜは二〇〇種を超えるウイルス起源の疾病によって構成されている。つまり「またかぜを引いた」と認識したとしても、今回罹患したのは前回とは異なった疾病であるかもしれないのだ。こうした認識の相違はそれほど簡単になくなるものではないだろう。いや、そもそもなくすべきであらうか?

また、患者会で知り合った六〇代の女性も、もともと血糖コントロールが不安定な体質のため、食前の血糖値を推測できるようにと医師から言われている。それってどんな感じなんですか」と聞いたところ、「自分の身体を外から感じるもので作っていく、研ぎ澄まされるような感じかな。自分をどう見ていくかがコントロールをよくすることになると」と答えてくれた。また、「糖尿病だと言われたとき、どう思いましたか」と聞くと、「どうして私だけって...でも、今はいろんな人の力を借りて、自分のいちばんいい生き方をどう求めていこうか」と考えている」と話してくれた。彼女にとって、糖尿病になったことは不幸な出来事だったが、今までの経験しなかった身体感覚を



あらたに発見したり、自分の生き方を見つめなおすきっかけとなっている。

五〇代のある男性は、医者から見れば明らかに治療指導の対象となるような高い血糖値を示す記録票を見せてくれた。彼は、今以上に低い血糖値を目指したり、ストレスになるし、仕事に集中できない。だから今のままでいい」と言う。彼は、医

## アトピーを病むということ

余語 琢磨  
(よごたくま)

早稲田大学助教授

### ギリシヤ語の「奇妙な」

今ではよく知られるようになったアトピー性皮膚炎ということは、「奇妙な」という意味のギリシヤ語に起源があるという。これは、命名当時のアメリカで、原因が複雑多岐にわたって特定困難なアレルギー疾患と考えられたことに

師が決めた「将来のためのQOL(生活の質)ではなく、今を生きてためのQOL」を選んだというわけだ。彼は、病気に関する専門書は手当たりしたい読みこなすほどの勉強家である。彼にとつてのQOLは、血糖値と合併症との関係を十分理解したうえで、将来と今とを天秤にかけた結果なのである。

よる。研究が進んだ現在も、発症のメカニズムは十分に解明されず、病院における治療は皮膚炎を外用药でコントロールする対症療法が中心となっている。当初この疾患は子どもも多く、思春期には消失するとされていた。ところが日本ではしだいに有症者の年齢層が上昇して慢性化・重症化する「成人型」が増え、一九八〇年代末から一九九〇年代にかけては社会問題にすなわつた。顔や手足の重い症状、耐え難いかゆみや増悪時の痛み、ステロイド剤の副作用などをめぐるセンセーショナルな報道や、本屋に山積みにされた関連書を覚えていらつしやる方も多いただろう。

### 「文化的病い」

ではアトピーの問題はすべて、医療への不信感をめぐる、医療者と患者の対立というよくある図式に回収されてしまふのだろうか。

### 人生の軌跡を描く

糖尿病という病気は、「コントロールさえしっかりしていれば健常者と同じ」といわれるように、「病気である」と「病気ではない」とのあいだでつねに揺れ動く病いである。病いをめぐる苦悩は、「わかつていなければならない」という食欲

病者の語りに注目すると、むしろその苦悩の多くは、より広い人間関係・社会生活のなかで生じている。見知らぬ人の好奇と嫌悪の混ざつた視線、電車で隣りに人が座つてくれないこと、クラス内のいじめ、接客業からの配置替え、友だちや異性との離別、親に対する心のきしみ、「アトピービジネス」と総称される各種代替療法の誘惑、偏つたイメージを増大しかねないマスメディアの報道、治療に必要なグッズの購入に伴う経済負担……

それゆえ病者は、羞恥心や孤立感、自己嫌悪や無力感を抱え、増悪時には自宅へひきこもりがちになる。退学や離職に至るケースも少なくない。

ある病気に対する「世間」の無理解、ネガティブな意味づけ、偏見や差別、社会的受け皿の欠如、効果のあやしい商法の跋扈は、決して過去のことでも遠い世界のことでもない。それは、わたしたち自身の心と社会に潜む問題である

のコントロールの難しさや「糖尿病になつてつきあいが減つた」という社交のできない辛さも生み出している。また、糖尿病であることが偏見、差別の対象となつて学校に入れなかつたり就職できなかったりすることもある。病いの経験はそれぞれの人々の人生の軌跡を描き出しているのだ。

と、病者の語りは伝えている。

アトピー性皮膚炎は一九七〇年代から世界各地で増加し始め、今や日本における有症率は小学生で一〇パーセント、大学生で八パーセントを超えた。また、発症は工業国や都市部に集中する傾向にある。そのため、住まいや食べ物といった生活様式の変化・環境汚染に伴う「文明病」との指摘は重く、病因探求の裾野はきわめて広い。

しかし同時に、日本におけるアトピー病者の多くの苦悩が、生理的な炎症そのものからずれたところで生起している事態も、もつと注目されてほしいと思つた。見知らぬ人・医療者・知人・家族との関係や、学校・職場・病院・営利団体・メディアのありよつたなかで、病者のアトピーをめぐる経験は、不可避的に「奇妙な」意味づけを伴つて形作られてしまふ。すなわち「アトピー」を病むとは、重篤な文化的病い」に言われることと同義なのだから。

藪のなかから治療に使う木の枝をとってきたヤツブの女性



木の葉を丸めてハンマーでたたきつぶす

化膿した患部に葉の絞り汁をすりつける



## 伝統薬の力

印東 道子  
(いんとう みちこ)

本館民族社会研究部

右のくるぶしに残る古い傷あとを見るたびに、伝統薬で救われた思い出がよみがえる。

今から二〇年くらい前、ミクロネシアのヤツブ島で発掘調査をしていたときのことである。くるぶしが化膿して腫れ上がり、歩行にも支障を来したことがある。素人療法で抗生物質を塗つたり飲んだりしたが、いっこうに腫れが引かない。しかたなく島にひとつしつて塗り薬をくれただけでまったく効果

があらわれない。そうこうするうちに抗生物質に対するアレルギー反応で目まで腫れ上がり、発掘作業を中断せざるをえなくなつた。

見かねて「ヤツブの葉」をためてみないかと声をかけてきたのは、土器を作つてくれていた六二才の女性だった。薬をもちがる思いと、民間医療がどれほど効くのかという興味から、ふたつ返事で治療をしてみらうことにした。

すぐに藪のなかへと消えた彼女は、長さ三メートルもの木の枝を担いで戻つてきた。枝のようなその葉を一〇枚ほど丸め、その辺にあつたハンマーでたたいてつぶす。ハンマーや床の汚さも気になつたが、彼女は指を洗うこともなく、葉の絞り汁を患部にたらして絞りかすをなすりつけただけ。次の日にはあれほどしつこかつた腫れが少し引いた。患部をぎゅつと押しつけて膿を出した後、再び葉を絞つて汁をかけ、すべての治療は終わった。

徐々に快方へと向かうなかで、民間医療の強みとは、患者がおかれた環境のなかで蓄積されてきた経験知と、それを施術する者への患者の信頼だと感じた。

特集 病い



## ムスリムの「邪病」

澤井 充生

(さわい みつお)

首都大学東京  
都市教養学部研究員

中国西北部の回族のムスリム(イスラーム教徒)社会には、「邪病(シエピン)」という病いがある。ある日突然、不可解なことを発したり、拳動不審になったりすると「邪病」といわれて忌避される。西洋医学でも東洋医学でも治療できないせいか、往々にして死者の靈魂(ルーフ)の仕業による「異常な病気」と説明されることが多い。

こうした「邪病」を施療できるのは、清真寺(モスク)の伝統的な宗教指導者ではなく、バーバとよばれる呪医である。バーバ自身も、邪病の体験者であり、聖クルアーンを朗誦したり、お香の煙の状態を観察したりするなどの自己流の方法で病因をつきとめる。バーバの診断後、病者の家族がクルアーンを朗誦して死霊の平安を祈念すれば、「邪病」は治癒し二度と発症しないという。

イスラームの死生観では、人間は死後、復活の日によみがえり、アッラーの審判によって来世の行き先(天



バーバ(男性)。これは非常にめずらしい装いで、辯髪(べんぱつ)姿にムスリムの礼拝帽を着用している

バーバ(女性)。イスラームの聖句を唱えた後、病者の眼に向かって息を吹きかけている様子

国が地獄か)が決定される。そのため、回族の靈魂観では、生者が復活の日まで死者の平安を祈念しなければ、死者が天国に行けなくなるという観念が根強い。死者に対する生者の恐怖心が死霊の呪力を生み出し、その呪力が生者の心身状態を悪化させる。これが「邪病」の論理なのだろ。

こうした展開を見ると、じつは「邪病」は死霊の呪力ではなく、生者の想像力によって生み出される病いなのではないかという疑いとなるが、それは「邪病」にかかっているわたしの「邪推」なのだろうか。

## 黄色の日

信田 敏宏

(のぶた としひろ)

本館研究戦略センター

マレーシアの先住民オラン・アスリの村には、「黄色の日」がある。「黄色の日」とは、夕方になるとあたり一面がオレンジではなく黄色に染まるように見える日のことだという。人びとは、「黄色の日」には霊が徘徊しており、うっかり外出すると霊が体内に入ってしまうと信じている。あるとき、わたしは「黄色の日」が原因で病いが起こるとい話を聞いた。

「黄色の日」が原因で亡くなった女性がいた。村の人びとはマリアアだと思われ彼女を病院に連れて行ったが、結局亡くなってしまった。彼女の父親であるカルという老人も「黄色の日」の病いにかかったことがあった。カルは体内に霊が入り込み、三日間食事を摂れなかった。断続的な発作に襲われ、意識を失い身体をガタガタと震わせた。周りの者が押さえつけられないほどの震えであった。村の呪医に診てもらったがよくならなかった。村のリーダーで強い呪力をもっているパティンが施療することにな

った。パティンは呪文を唱え、クミヤンとよばれる芳香性の樹脂に火をつけ、その煙をカルの耳の穴や頭のてっぺんから吹き込んだ。そして、独自に作った薬用オイルをカルの身体に塗った。するとカルはにっこり笑ってパティンに握手したという。彼の意識は回復したのである。

この話を聞いた後、わたしも「黄色の日」を経験した。黄色く染まった景色があまりにも不気味だったので、日が沈むまで、わたしは家でじっとしていた。



薬用オイルを作る作業

祖先への祈りをするパティン

## 病いを創り出した開発

石井 洋子

(いしい ようこ)

東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所  
非常勤研究員



開発計画の水田で働くギクユの女性たち。この日は、田植え前の雑草とりをおこなった

アフリカの第二の高峰、ケニア山(標高五一九九メートル)の麓に美しい水田地帯が広がる。ここでケニア最大の近代的な灌漑開発プロジェクトが展開されており、一九九〇年代には三〇億円近い日本のODA資金が投入された。

通常、こうした開発最先端の地では医療ネットワークが充実し、公衆衛生プログラムをきめ細やかに実施していると想定されよう。水田で働く人びとは、計画された社会生活のもとで安全な生活を営んでいると考えられる。しかし、わたしが、そこに暮らすギクユの人びとの村でフィールドワークをおこなったとき、彼らは開発が原因とでもいおうべき幾多の病気に苦しんでいた。灌漑水路が張りめぐらされたことで、水を媒体とする熱帯病が蔓延していたのである。

村に水道はなく、人びとが生活用水をとる水路は、家畜の水飲み場や洗濯場をも兼ねていた。そのため、水を十分に煮沸しないで飲んだ場合、腸チフスの感染率は異常に高く、たとえば川の水を用いる密造酒の常飲者(年配の男性)の多くは病いに伏していた。住血吸虫病も多く、村で出会った男性は、皮膚を貫通して体内に入り込む住血吸虫を避けるために、足にガソリンを塗って水田に入っていた。マリアアは、もはや慢性疾患ともいえる。診療所は、村から六キロメートル離れたところしかない。

灌漑開発は、豊かな実りを生み出したと同時に、多くの病気をもたらした。近代的な灌漑システムの暗は、開発を支える人びとの人生そのものを脅かしている。

## 特集 病い